優秀賞

小さな親切の輪

香川県　桜町中学校　一年
藤沢　明早美

８月１４日に開催された高松まつりの総踊りに、私は「栗っ子連」の一員として参加した。

『一合まいた』を全力の笑顔で踊り切ったあと、いっしょに踊った友達と中央公園内の屋台をまわった。もう夜 10 時も過ぎ、人も少なくなっていて、空いているテーブルを見つけ、そこに座って今日の感想を話し合ったりしながら、それぞれが買った物を食べていた。

食べ終わった後、移動しようとしてふと周りを見ると、先ほどまで人が座っていたベンチに、空のプラコップが置かれてあった。私はそのまま移動しようとしたが、友達がそのごみを迷うことなく拾い、ごみ箱に捨てた。私は、ハッとした。知らないふりをしたことが、急にはずかしくなり、友達といっしょにごみを拾った。

しかし、そのときの私は、この公園がきれいになるように、みんながいやな思いをしないようになど、他人のことを考えて拾ったわけではなかったと思う。自分が良いことをしたと満足するため、ごみを迷うことなく拾える友達を見て、その行動ができなかった自分の後ろめたさを消すためだった。

拾ったごみを捨てて、そこから移動した。いっしょに踊った別の友達とも合流し、また話したりして３０分ぐらいが過ぎた。そろそろ帰ろうとして周りを見ると、たくさんのごみが机に上に残っていたり、落ちていたりしていた。

そこで私は、自分の意志でみんなのためにごみを拾った。自分が満足するためではなく、ただ公園がきれいになるようにと思ってごみが拾えたのだ。

すると、ほかの人もごみを拾い始めていた。もしかしたらその人たちも、さっきの私のように自分のためにごみ拾いをしているのかもしれない。でも結果的に、ごみ拾いという小さな親切の輪が広がっていた。テーブル周りのごみは、あっという間にきれいに片づいていた。

みんなと別れて公園を出たとき、ふと後ろをふり返った。

（私たち数人の親切は小さいけれど、少しはみんなの役に立てたのかな）

駅までの帰り道、落ちていたペットボトルをごみ箱に捨てた。いっしょにいた弟と母が、びっくりしていた。もう少し歩くと、またごみが落ちていた。すると次は、弟がそれを拾って捨てた。今度は私がびっくりした。小さな親切の輪が、こんなにすぐに広がるなんて！

家に帰って、今日のできごとを思い返してみた。満足できる踊りができた。友達と楽しい時間を過ごせた。小さな親切ができた。とても満足した気持ちになった。

これからも、自分にできる小さなことを、行動に移せるようにしたい。こういう気持ちにさせてくれた友達に、感謝したい。